



## 道端で出会ったイタドリから思索に耽る

公益財団法人日本植物調節剤研究協会 評議員  
 BASF ジャパン株式会社アグロソリューション事業部開発部長  
 郡嶋 浩志

新型コロナウイルスの影響で在宅勤務を余儀なくされていた今年4月上旬のこと、近所のスーパーマーケットに昼食の弁当でも買おうと、公園の遊歩道を歩いていた。平年より10日以上も早く訪れた3月20日過ぎの桜の満開はとうに過ぎ、一部の枝に新葉とともに花が残っている。「数年前の娘の高校入学式の時は満開だったのに」。しかし公園内は新緑が美しく、眩しく輝いて見える。そんな道すがら、地面から顔を出していたイタドリ（タデ科の植物）を見つけ、私はふと12歳まで過ごした故郷の福岡でのことを想いだした。

もう50年以上前のこと、私は母親の実家へ春休みには里帰りし、祖父が所有していた竹林で筍掘りをするのが毎年の行事になっていた。竹林に向かう途中、斜面に生えていた30～50センチ程の赤みがかかった植物の莖2～3本を祖父が根元近くから鉋で切り取り茎皮を剥いて、その1本を私に手渡してくれた。これは何かと訊くと、「カッポンったい。食べてごらん。」と祖父は私の目の前でかじり始めたのを見て私も食べてみた。酸っぱい。中が空洞でそれほど強い繊維質も感じられず、見た目より柔らかく食べやすかった。土手に生えている野草を採って、その場で食べるなんて、こんな楽しいことができるんだなと感動したのを覚えている。数年後、標本作成のために昆虫採集で捕まえたイタドリハムシが寄生していたイタドリが、カッポンであったことに気付いてさらに感動した。過去に食べることで知ったカッポンが、採集した虫の寄主植物と繋がったことが、なぜか妙に嬉しかった。

イタドリは国際自然保護連合の世界の侵略的外来種ワースト100 (IUCN, 2000) に選定されている。日本ではイタドリを餌とする昆虫などが生息し、イタドリの過剰繁茂を抑え込んでいるが、天敵の少ないヨーロッパでは大問題になった。シーボルトによって19世紀に長崎から観賞用としてヨーロッパに持ち込まれ土壌侵食防止や家畜の餌としても使われたそうだ。当初、観賞用として輸入したとは、正に“蓼食う虫も好き好き”だ。しかし繁殖力が旺盛すぎて野生化が進み、建造物のコンクリートを破壊し問題視されるようになった。生態系のバランスが保たれていた環境から敵のいない環境に

運ばれたことでアンバランスを生み出した。イギリスがその対策として2009年にイタドリを特異的に食すイタドリマダラキジラミを生物的防除資材として日本から導入したことは生物的防除の事例として知られている。

2018年、世界気象機関は世界各地で発生している異常気象、例えば猛暑や局地的豪雨などが増加しているのは、長期的な地球温暖化の傾向と一致していると発表している。意図的ではなかったにしろ人間の手の入ることで環境が加速的に変化したことは、今では誰もが感じているだろう。今春桜の開花が早かったように、気象情報の記録更新をこのところ毎年のように耳にする。刹那的な人類の活動が招いた結果なのか。この地球規模の大きな変化にどう向き合えばいいのだろうか。作物栽培では、温暖化に対応した栽培方法、栽培地域、品種改良、病害虫・雑草対策など多数報告されていることはご存知の通りである。対応・対策を講じながらも、適用・適応を考える時代になったのだと感じる。

AIやロボティクスなど新しい技術の導入で、10～20年後さらには50～100年後の農業、そして病害虫防除・雑草管理は大きな変化を遂げているのだろう。長期的ビジョンの元、過去の長い農業の歴史から得られた知識と経験、さらに農業分野以外からの知識や経験を「繋ぐ」ことにより、この先次々に直面するであろう短・中期的問題に適正に対処し、サステナビリティな農業が実現・継続されることを期待したい。安全・安心な様々な食材が、この先ずっと食卓に並ぶことができる世の中であり続けることを望みたい。そして私自身も農業に関わる者として、農業開発の面から貢献してゆきたいと考えている。

「この巻頭言が印刷されるころには、コロナ騒ぎの終息に目処が立っていただければいいな。」と思いながら公園の遊歩道を歩いていた。